

honey

第一章

「ごめんね、利都、私、弘樹の赤ちゃんがお腹にいるの」

恋人の間宮弘樹と約束したレストランで利都を待っていたのは、弘樹と、利都の会社の同期で親友の、村上舞子だった。

なぜ二人が一緒にいるのか。そう尋ねるよりも先に切り出された舞子の言葉の意味がわからず、利都は凍りつく。

「私が悪いの、利都を傷つけてるってわかってるのに……どうしても弘樹から離れられなかった私が悪いの」

利都は、舞子の美しい顔から目をそらした。じわじわと、彼女の言葉が、利都の頭に染み込んでくる。

——自慢の親友である舞子。誰もが振り返るくらい美人で、頭が良く、光を一身に浴びているような女の子なのに。

そんな舞子がなぜ、利都の恋人に手を出す必要があったのか。

弘樹は利都の大学の先輩で、利都が大学三年生の頃からもう四年間も付き合っている。

弘樹とは、勤めている会社が違う。舞子に彼を紹介したことはあるが、二人が連絡を取り合っている様子なんてなかったのに……

叫びたい気持ち、利都は必死に呑み込んだ。

「な、なん、で、赤ちゃん……妊娠って……え？」

利都は震える声で、やっとそれだけを口にする。

ワタシ、ヒロキノアカチャンガオナカニイルノ……

舞子の言葉が利都の頭のなかにこえました。

絶対に自分と目を合わせようとしないう弘樹と、美しい白い頬を涙で濡らす舞子。

利都の目の端に、二人の重なりあう手が映った。弘樹の大きな手と、舞子の華奢な手……まるで共に利都に立ち向かうかのように、しっかりと重なりあった、二人の手。

ガタガタ震えながらスカート握り締め、利都はようやく一言、口にした。

「わかった」

利都は理解した。もう、自分には弘樹との未来などないことを。

弘樹は利都を捨て、舞子を選んだのだ。

昨夜交わした、弘樹とのメールを思い出す。

弘樹は、普通だった。今日の、この店での待ち合わせの話だって、いつもと変わらない調子で取り出してきたのだ。隠し事があるなど、微塵も感じさせなかった。

何も知らず、利都は幸福感に包まれていたのだ。

それが今、一瞬にして砕けた。幸せを構成していたものが、無数の破片となって利都の胸に突き刺さる。

怒りと悲しみを噛み殺し、利都はふらふらと立ち上がった。その拍子に椅子が音を立てて倒れたが、起こす気力もない。

「私、帰る。じゃあね」

「あの、利都……」

舞子の声に、利都は、一度だけ振り返った。

彼女は、とても傷ついた表情を浮かべている。けれど、傷つけられたのは利都のほうだ。

最近舞子は元気がないな、なんて心配していたけれど、その理由はこんなことだったのか。

舞子も弘樹も結局なにも言わなかった。利都は店中の人々の視線を浴び、泣きながらその場を飛び出す。

こうして利都の恋は終わった。大好きだった恋人と一番の親友は……裏切り者になった。

——あれからもう一ヶ月経つんだ。そろそろしつかり立ち直らなくちゃ。

自分にそう言い聞かせながら、利都は春のきざしが見え始めた駅のホームに降り立った。親友と恋人を同時に失った日から気分が塞いでしかたなく、土日は家にこもりがちだ。けれど、いい加減に明るい気分になりたい。このままでは、自分がダメになってしまいうさだ。

改札を抜け、サブカルルの中心地として知られている洒落た街を、利都はフラフラと歩いていく。

通勤では使わないので、この駅ではあまり降りたことがない。けれど、ゆっくり探索しながら歩いてみると、楽しい街だ。

手を繋いで歩く若いカップルに、微笑ましい気持ちになる。そんな温かい気分になるのも久しぶりだった。

ふと利都の視界に、愛らしい小物や洋服が飛び込んでくる。

「買い物したいな……」

一ヶ月ぶりに、利都はそう思った。

——そうだ、いつまでも引きこもっていちやダメだ。買い物だっと思っていたし、会社の寮を出て今より広い部屋に引っ越したい。やりたいことはたくさんある。会社に着ていく服が欲しい。カフェめぐりもしたいし、靴もカバンも欲しい。だから、仕事して稼がなきゃ。

明るい日差しの下を歩きまわったおかげか、利都の身体に久しぶりに軽やかさが蘇った。傷つけられた心はまだ痛むけれど、少しだけ前を向く元気が出てきたのかもしれない。

弾む気分、利都は路地を曲がった。いかにも通好みといった感じのカフェやバーが立ち並んでいる。

ふと利都は真っ白な内装のカフェに目を留めた。店の前には何種類かの鉢植えが置かれている。明るく洒落た印象の、雰囲気の良い店だ。

「いらつしやいませ」

店に入ると、清潔感のある店員に声をかけられる。利都は笑顔で会釈をして、空いた席に腰を下

ろした。

周りを見ると、そこそこの客入りだ。日替わりランチの Pasta が人気らしい。それを注文し、利都は頬杖をついた。

——可愛いお店。ランチが美味しかったらまた来ようっと。

改めて店のなかを見回すと、漆喰塗りの壁にはラックが設置され、雑誌が立てかけられていた。

あまり見かけない英語タイトルの雑誌だ。綺麗な風景の写真が使われた表紙に心が惹かれる。立ち上がり、読んでみようと思っただけの利都の手に、別の誰かの手が触れた。

「あ、すみません」

慌てて手を引っ込め、利都は傍らの人物を見上げて……絶句した。

——な、なにこの人、綺麗……芸能人!?

そのくらい、その青年は美しかった。日本人とは思えないほど白い肌に栗色の髪、澄んだ瞳はほのかに緑がかかった茶色で、ガラス玉のようだ。利都は呆然とその青年を見上げた。

「この本、読みたいの？」

青年が、不意に苦笑した。その笑顔を見て、利都の心臓が跳ね上がる。

「あ、あっ、あの、いいです！」

動転して首を横に振り、利都は身体を引いた。

「私、よく考えたら英語読めないの」

「あはっ、中身は日本語だよ、この雑誌」

青年が人懐こい声で言う。光に縁取られているかのように鮮やかな笑顔が眩しい。

——もう少し、この人と話したいな。

なにか気の利いた返事をしなくては、と利都が考え込んだ時、店の奥から出てきたギャルソン姿の男性が青年に話しかけた。

「チカ！ お前も Pasta 食う？」

どうやら、店員と彼は知り合いのようだ。利都は、先ほど彼に触れた手を思わず握り締めながら、チカと呼ばれた青年と店員を交互に見た。

「ありがと、鉄ちゃん。いただきます！」

青年がそう言つて、利都に背を向ける。利都はうつとりと、そのしなやかな細い背中を見送った。——すごく綺麗な人……鳥肌が立つくらい綺麗。

そう思った瞬間、青年がくるりと振り返つて言った。

「ねえ、君、一人で来てるんだよね」

「えっ……？」

美貌の青年が利都に微笑みかける。

「一緒に食べよ。俺、人とご飯食べるの好きなんだ。それに、なんか、君のことをナンパしたくなつちゃつて」

『ノー』と言われることなど考えてもいないような無邪気さだった。

慌てて首を横に振りかけた利都は、ふと思った。

——こんな綺麗な人とご飯を食べるチャンスなんて、もう一生ないんじゃない？

普段の利都なら、結構ですと断っていただろう。

けれど、今は、少しでも明るい気持ちになりたかった。いつもと違うことをして気分を変えてもいいのではないかと思う。寂しく薄暗い日常に、明るい光を、新鮮な風を取り込むのも悪くない。

「はい……じゃあ、一緒にさせてください」

かすかに震える声で利都は答えた。青年が一瞬目を丸くし、次いでニッコリと微笑む。その笑顔はまるで、スポットライトを浴びたトップモデルのように美しかった。

日替わりパスタを注文し、それが運ばれてくるまで、青年はあまり喋らなかつた。時折ぼんやり物思いにふけり、不意に顔を上げては、他愛ないことを話しかけてくる。その全ての仕草が、洗練されていて、利都は思わず見とれてしまう。

「お待たせしました、こちらベーコンと菜の花のトマトパスタです。どうぞ！」

鉄ちゃんと呼ばれていたギャルソンが、二つの皿を手に席にやってきた。

「ありがとう！ ここ、彼のお店なんだよ。雰囲気良いでしょ？ 料理も美味しいよ！」

ギャルソンは青年の言葉に笑みを浮かべ、ごゆっくり、と言つて去つてゆく。

利都は緊張で高鳴る胸を押さえ、そつとパスタを頬張つた。

——美味しい。

久しぶりに感じる、身体が喜ぶような味わいだった。ソースに利都の好きな菜の花が入っている。

「美味しいです」

「あは、良かった」

利都の答えに、青年が笑顔になった。そして、さつき利都が手に取ろうとした雑誌をテーブルの上でめくる。

利都の目に、雑誌の特集ページが目に入った。かなり昔に流行した時計の記事のようだ。随分古いな、と思う利都の目の前で、青年がひよいと雑誌の向きを変え、開いたページを見せてきた。

「ねえねえ。見て、これ」

そのページには、デコラティブな時計をはめた女性モデルが写っていた。

普通のOLである利都には到底手の届かない、海外の超高級ブランドのロゴが大きく描かれている。

女性モデルは、長い栗色の髪に七色の花を飾り、ギリシャ神話に出てきそうなドレスを巻きつけている。その姿は芸術品のようだ。

「綺麗な写真……」

そう言いながら、利都はふとあることに気づいた。雑誌を手にした青年と写真の美女はどこか似ている。

「あれ、この方とご親戚ですか？」

「ううん、このモデルは俺」

利都は驚いて、雑誌と目の前の美しい青年を見比べた。

向かいにいる彼は男性にしか見えない。この女性と同一人物だというのはにはわかには信じがた

かった。それに、こんな世界的に有名なブランドの仕事をしているとしたら、超一流のモデルなのではないか。

「びっくりしたでしょ。もつとガリガリに痩せてた頃の写真だから。あ、俺、チカつて言うの。よろしくね」

「ちか、さん……」

女の子の名前のようだ、と黙っていた利都に、青年……チカが言った。

「寛親つて名前だから、皆にチカつて呼ばれてるんだよね。君の名前は？」

美味しそうにストローからカフェオレを飲み、青年は重ねて言う。

「名前、教えてよ」

「あ、あの、今井利都と言います」

素直に名乗ってしまったあと、黙っていれば良かったかな、と利都は思った。

なんだから、この美しい王子様のペースに吞まれている。

「りっちゃんかあ」

チカが呟き、もう一度ストローに口をつける。一連の仕草がひどく優雅で、利都は親しげに名前を呼ばれたことにも気づかず、彼に見とれてしまった。

カフェに差し込む明るい昼の光が、チカの栗色の髪をふわりと輝かせる。まるで光に祝福されているようだ。

「なんか寂しそうだね」

「えっ……」

チカの唐突な言葉に驚いて、利都はチカの顔をまじまじと見た。ナンパの常套句だとわかっているのに、とっさに笑って流せなかった。

寂しそうな言葉が発したチカを黙って見つめる。

彼の澄んだ瞳からは、なんの感情も読み取れない。

「うん、寂しそうだから声かけたんだ。あれ、りっちゃん、食べないの？」

「あ、はい、食べます」

チカは手にしていた雑誌をテーブルにおく。それから、厨房ちゅうぼうに向かって声を上げた。

「鉄ちゃーんっ！」

先ほどバスタを運んできてくれたギャルソンが顔を出した。

「昔の俺が写ってる雑誌、このお店にもっとおいていい？」

「勝手にしろ」

笑いながら、ギャルソンがそう言った。それから利都を見て、一礼し、優しい口調で尋ねる。

「料理、お口に合いましたか？」

「あ！ はい、美味しいです。菜の花がアクセントになって、この味、すごく好き。麺めんももちもちしてて好みです！」

「よっしゃ、ありがとうございます！」

ギャルソンはガッツポーズをしてもう一度頭を下げ、嬉しそうに厨房へ戻っていく。

目を細めてその様子を見送ったチカが利都に言った。

「鉄ちゃん、料理にすげー気合い入れてるからさ、褒めると喜ぶんだ」

「お友達なんですね」

「うん、昔のモデル仲間なの。今は、鉄ちゃんはカフェ経営者で、俺はただのサラリーマンだけだね」

『元モデル』だなんて華やかな肩書きだと思いき、利都は溜息をつく。

なぜ彼は、見るからに地味でもしるみもない、平凡な利都に声をかけたのだろう。

利都の取り柄なんて、日本有数の大手商社、澤菱さわびし商事で働いていることくらいしかない。

それだってわざわざ口にしなければ伝わらないし、男性にとって魅力になるかどうか微妙なものだ。

利都はチカを見つめた。何度見ても引きずり込まれそうなくらい美しい、ヘーゼルの目……宝石のようにきらきらと輝いて見える、不思議な目だ。

——綺麗すぎて、なんか怖くなってきた。

利都はそっと目をそらす。すると、そんな利都の様子に気づいたのかチカがニッコリ笑って身を乗り出した。

「あ、ねえ、デザートにアップルパイ食べようよ！」

食べられるかな、と思いつつも、利都は頷うなずいた。

なんだか本当に、この美しい人のペースに吞まればなしになっている。

「りっちゃんは甘いモノ好き？」

「え、あ、はい。結構好きです」

「俺も！」

チカは嬉しそうな声で言うと、手を上げて女性の店員を呼んだ。

「すみません、アップルパイ二つ！ アイヌ載せてください！」

それから形の良い顎を手の甲に載せ、上目遣いに利都を見つめた。落ち着いていた利都の心臓が、チカの視線に再び跳ね上がる。

緊張してだんだん変な汗をかいてきた。うつむいた利都に、チカが穏やかな声で尋ねる。

「あのさ……目の下、真つ黒だけど、大丈夫？」

「えっ？」

利都は驚き、慌てて自分の顔に触れた。

肌がガサガサになっている。自分の顔は恐ろしいほどしおれていた。ずっと、自分に手など掛けていなかったことを実感する。

——どうしよう。恥ずかしい。こんな綺麗な人の前で、私、ぼろぼろ……

「ね、ここ押してみな」

チカがなんでもないように笑い、揃えた三本の指で自身の目の下を押しした。

「なん、ですか、それ……」

両頬を手で隠したまま、利都は尋ねる。

「クマに効くツボだよ！ そっと押してみなつて。りっちゃんまだ若そうだし、すぐ消えるよ」

「ツボ……ですか……」

言われるがままに、利都は目の下をそっと押しした。思ったより痛くて、思わず手を離す。

利都の様子を見守っていたチカが、明るい笑い声を立てた。

「あは、素直だね」

利都はまた恥ずかしくなり、顔から手を離す。

素直というのは褒め言葉なのだろうか。親からも友人からも、素直で真面目な優等生と言われる。けれど、その『長所』は、利都を幸せにしてくれただろうか……

ふと、舞子の笑顔が利都の脳裏をよぎった。

——ちゃんと幸せになったのは、素直なだけの私じゃなくって、自己主張の強い舞子だったのに。

「あ、アップルパイ来た！」

チカの声に、利都は我に返った。慌ててぎこちない笑みを浮かべ、可愛らしい白い皿をギャルソンから受け取る。

「美味しそう！」

「このメニュー、鉄ちゃんの一押しだから！」

チカが笑い、それから、一瞬、ためらうような仕草を見せたあと、少しトーンの落ちた声で切り出した。

「そうだ、りっちゃんあのさ、君、この前……」

チカの透明な目が、利都をじつと見つめている。

吸い込まれそうな目だ。そう思い、利都は慌てて視線を外した。王子様の眼差しを受け止められるほど強い心臓は持っていない。

「は、はい、なんですか？ この前って」

「いや、やっぱいいや」

なにか言いたげにしつつも、チカが口ごもる。

そしてすぐに、わざとらしくくらい大きめにフォークを構え、明るい声で言った。

「なんでもない。食べよ。アイスはりんごに載せて食べてみな、美味しいから！」

利都はチカの態度に引っ掛かりを覚えて、手を止める。

『この前』とはなんだろう。チカはなにを言おうとしたのだろう。

だが、思い当たることはなにもない。

チカは、自分が発した言葉など忘れたかのように、笑顔でアップルパイにナイフを入れている。

利都もスプーンで白いアイスクリームをすくい取り、りんごとともに口に運んだ。バニラビーンズがまぶされた甘く冷たい塊が、利都の喉を滑り落ちていく。

——この前……って、なんのこと？

チカに会ったことなど、一度もない。元モデルという華やかな彼が自分となにか関わりがあったとも思えなかった。

もしかしたら、チカがなにか思い違いをしているのかもしれない。そう思い、利都は話を変える

ことにした。

「りんごに載せて食べたら美味しいですね」

チカが微笑む。きらめくような笑顔の前で、利都は『この前ってなんですか？』という言葉呑み込んだ。

薄暗い家に帰り着いた利都は、カーテンに手をかける。

「こんなに暗くしてたら、気分も暗くなるよね」

ふわふわした気分で、コートのポケットに入れたカフェの名刺を取り出す。

鮮やかな緑の葉っぱを箔押しした小さなカードに、端正な文字でメールアドレスが綴られている。

——ナンパしてきた人のメルアドを受け取っちゃった……

利都はかすかに頬を火照らせ、そのカードをテーブルの隅においた。

なぜこれを持ち帰ってしまったのだろう。相手が、夢のように綺麗な王子様だったからだろうか。

普段の利都なら、突っ返していたはずなのに。

『来週の日曜日のこの時間、また店にいるから、良かったら来て』

そう告げたチカの言葉を思い出し、利都はぶんぶん頭を振った。

——会いに行つてどうするの？ 社交辞令だよ。浮かれてないで落ち着かなきゃ。

利都の脳裏に、チカの姿が浮かぶ。内側から光を放っているような、きらきらした姿が。

あんな人に笑顔で話しかけられたら、どんな女も舞い上がってしまうだろう。どの角度から見ても

もうつとりするほど美しい顔に、無駄な肉のない身体つき。黒のニットにジーンズという、なんてことのない出で立ちでも、店中の視線を集めていた。

気が向いたらメールちょうだい、と言っていたチカの実顔を思い出し、利都は唇を噛む。どくん、と心臓が鳴った。

利都は慌てて、高揚感を打ち消す。

——社交辞令だよ、社交辞令。

自分にそう言い聞かせ、利都はカフェの名刺を引き出しにしまった。

それから、カレンダーを見上げる。

来週の日曜日……指折り数えそうになり、焦って首を振った。自分は、なにを浮かれているのだろう。

利都は机に背を向け、床拭き用のモップを取り出す。

家を掃除して、自分の手入れもしよう。そう思い、利都は自分の目の下のクマにそっと触れた。

その夜、夢のなかで、利都は華やかな街を歩いていた。

隣には弘樹が立っている。優しい表情で、いつものように、利都のほうを見て穏やかに笑っている。

その笑顔を見て、利都は心からホッとした。

あれは『夢』だったんだ、これが現実なんだ。

「利都、これからどこに行くの」

弘樹の問いに、利都は少し考え込む。それから明るい気分で答えた。

「舞子のところ」

最近、舞子に会っていないような気がする。いろいろ話したいことがあるのだ。それに、一緒に美味しいものを食べに行きたいし……そう思って、弘樹と並んだまま、利都は弾んだ足取りで歩き出した。

その足元が、不意にぼろりと崩れ去る。

真つ黒ななにかに呑み込まれながら、利都は思った。

——違うよね。こつちが夢だった。もう弘樹はいないよ、舞子もない。二人で私に背を向けて、遠くに行っちゃった……

目が覚めると、真つ暗な天井が見えた。

利都は濡れた顔を手の甲で拭い、なまなましくのしかかる孤独に歯を食いしばる。

また自分は泣いているのか。情けない気持ちで顔から手を離し、利都は顔を洗うために起き上がった。

——私の人生に、なにか良いことあるのかな……

惨めな気分になり、再び涙が零れていく。利都は洗面台に手をつけて止まらない涙を必死で拭いた。鏡には、顔を赤く腫らした、ポロポロの痩せた女が映っている。

せつかく少し元気になったのに逆戻りだな、そう思いながら顔を洗って、利都は部屋に戻った。

「うう、頭痛い……」

頭痛薬を飲もうと、手を伸ばし、引き出しを開ける。薬の脇に小さなカードが入っていた。チカのメールアドレスが記された、愛らしいカフェの名刺だ。

泣きすぎてぼんやりした頭で、利都はそのカードを手を取った。

——もしかして、綺麗な人と会って一緒に時間を過ごしたら、明るい気分になれるかな……？

私、なにしてるんだろう……そう思いつつも、利都は思いきってパソコンを立ち上げ、メーラーを起動した。

『こんばんは、今井です。今日はアップルパイをごちそうになり、ありがとうございました』
必死で頭をひねり、それだけの文字を打ち込む。なにを書いたらいいのかわからない。

しばらく画面の前で思索にくれたあと、利都は再び文字を打ち込んだ。

『楽しかったです。チカさんの昔の写真、すごく綺麗でした』

不意にチカの言葉が蘇り、利都の手が止まった。

——りっちゃんあのさ、君、この前……

彼はなにかを言おうとしていた。

この前、というチカの言葉には心当たりがない。なにを言おうとしたのだろう。どこかで、会ったことがあるのを利都が忘れているのだろうか。

尋ねようか迷った末、利都は結局こう書くことにした。

『もしかして私、チカさんにどこかでお会いしましたか？ だとしたら、覚えてなくてすみませ

ん。今日は本当にありがとうございました』

これだけ書くのに、十分近くかかった。しばらくためらったあと、利都は送信ボタンを押す。

あたさわり
当り障りのない内容だし、フリーメールからの送信だから、携帯のアドレスから送るより安全なはずだ。

——メール、送っちゃった……なにやってるんだろ、私……

溜息をつきながら、利都は机に突っ伏した。

時計は二時を指している。なんて時間にメールを送ってしまったのだろう。後悔したが、今さらどうしようもない。

頭痛薬を飲み、メーラーにたまっていたメルマガを読んでいたら、ピコンというメールの着信音が聞こえた。

利都は慌てて、受信箱を開く。新しいメールが一通来ていた。

タイトルは『こんばんは』。差出人は、『チカ』とある。

どくん、と利都の心臓が鳴った。

緊張で小刻みに震える手で、利都はそのメールをクリックした。

『こんばんは。随分遅くまで起きてるね、俺も仕事の準備が終わらないので起きてました。メールありがとう。実はりっちゃんのこととはちょっとだけ知ってます。日曜日に話そうね。待ち合わせ用に電話番号も教えておきます。チカ』

メールには、そう書いてあった。

「この格好、変じゃないかな」

利都は駅のトイレで大きな鏡に己の顔を映し、溜息をつく。

真っ直ぐな髪のおとなしそうな女が、青白い顔でこっちを見つめ返していた。

次の週の日曜日、美貌の王子様の呼び出しに応じて、フラフラ出てきてしまった。利都は自分の身体を落ち着かない気分で見下ろした。

今日の服装はベージュのコートに、黒のスカートと薄いピンクのニット。ブーツは冬のボーナスで買ったお気に入りなもの。休日用のごく平凡な服装だ。

利都は自分の服装を確かめ終え、小走りでカフェに向かった。この前はあんなに魅力的に映っていた雑貨屋や服屋も、まるで目に入ってこない。胸がドキドキして、苦しかった。

「あれ、この間の……？ チカと待ち合わせしてるんですね？ 聞いてますよ」

カフェの前で看板を出していたギャルソンの『鉄ちゃん』が、利都の姿を認めて言った。

おそらくチカが連絡を入れておいてくれたのだろう。

スタイルのいいギャルソンを見上げ、利都はぎこちなく頷いた。

「はい、こんにちは……」

「こんにちは。どうぞ。この前の席でお待ちください」

『鉄ちゃん』にもう一度深々と頭を下げ、利都は席に向かう。

腰を下ろしてカフェオレを注文し、そこではつと気がついた。

——チカさんになにか土産を買ってくればよかった。お菓子とか。

舞い上がってしまったって、そんなこと考えもつかなかったのだ。気の利かない自分がかっかりしつつ、利都は運ばれてきたカフェオレに口をつけた。

コーヒーの良い香りに、ホッと心がほぐれる。

大きな窓から、道行く人々を眺めていると、不意に華やかな気配がした。

「あ、待たせちゃった？ ごめんね」

顔を上げると、白いVネックのニットに、デニム姿のチカが立っていた。小脇にグレーのコートを抱えている様子は、怖いくらいさまになっている。

一瞬口を開けて見とれた利都は、慌てて立ち上がった。

「こ、こんにちは、全然待ってません」

「こんにちは」

透き通る不思議な色の目を細め、チカが高すぎも低すぎもしない心地良い声で言った。

王子様は、声まで綺麗だ。利都の心臓が再び高鳴る。

「あ、カフェオレいいね、俺も飲もう」

チカがそう言って、流れるような仕草で利都の向かいの席に腰を下ろす。体重がないのだろうか、

と思うような身軽な所作だ。

棒立ちになっていた利都も慌てて、座りなおす。

絹のような栗色の髪にぼうっと見とれていると、不意にチカがメニューから顔を上げた。

「りっちゃん、ご飯食べるよね？」

どうしよう、なんて答えれば正解なんだろう。利都は緊張で表情を凍りつかせる。そんな利都に

微笑みかけ、チカが明るい口調で言った。

「食べていこうよ。ごちそうするから好きな選んで」

「いえ、自分で払います」

利都はかすれた声で答え、スカートの上で手をギュッと握った。

「まあいいじゃない。呼んだの俺だから。なにが食べたい？」

「じゃ、じゃあ、これ……すみません……」

利都は手を握ったまま、一番安いメニューを指差した。なにも載っていないプレーンなパンケーキだ。

「お昼、それでいいの？」

どうせなにも喉のどを通りそうにない。利都は無言で頷うなずき、そのままうつむいた。チカの顔が見られない。

それに自分の顔を見られるのが恥ずかしかった。平凡だし、クマもひどいまま。唯一まともなのは、今朝ブローしてきた髪の毛だけだ。

チカが『鉄ちゃん』を呼び、注文する気配がした。利都は自分の黒いスカートを見つめたまま、身体をこわばらせていた。

「あ、ねえ、りっちゃん。顔いじっていい？」

意味のわからないチカの言葉に、利都は驚いて顔を上げる。

「俺、りっちゃんの隣座っていい？ 化粧ポーチ持つてる？」

「え、え、あの……」

返事を待たずチカが立ち上がり、利都のすぐ横にストンと腰を下ろした。

いきなり間近に迫った『王子様』の華やかさに、利都は思わず身体を引く。

「あ、あの……」

「化粧ポーチ貸してくれる？」

チカのオーラに押され、利都は小さな化粧ポーチを鞆かばんから取り出した。

「開けていい？」

ポーチを手にして首をかしげるチカに、頷うなずく。

『顔いじっていい？』とはどういう意味なのだろうか。

「あ、なるほどね……アイシャドウはこれなんだ。なんで緑のシャドウなんて買ったの？」

アイシャドウについて聞かれたことに面食らいつつ、利都は恐る恐る答えた。

「グ、グリーンは夏の限定品って言われたから、ですかね？」

利都の答えに、チカが眉根を寄せる。

「ちよつとりつちゃんには色が濃すぎるよ。あれ？ 口紅はオレンジなの？ 朱肉みたいな色だから、りつちゃんには派手かもね」

利都は絶句した。男性に化粧品を批評されるとは思っていなかったのだ。化粧品選びにはあまり自信がないので、はつきりと合っていないと言われ、落ち込む。

「た、たまにはピンク以外もつけるといって、店員さんにすすめられて……」

真剣な目で利都の化粧ポーチを探っていたチカが、顔をしかめた。

「アイライナーは紫なのかぁ」

「それも秋の限定品だったので……でも使ってません。アイライナーは目に刺さりそうで」

「すごい色の組み合わせだね」

利都は、言葉に詰まる。たしかにとんちんかんな色の取り合わせだとは思うが、化粧直しなどしないので、深く考えずに使わない化粧品もポーチに突っ込んでいたのだ。

「わかった。じゃあ顔いじるね。この前思ってたけど、りつちゃんは、美人なのに化粧で損してる」

いつの間にかチカの方のカフェオレを運んできていた『鉄ちゃん』が、テーブルの横で苦笑した。「お客様、俺の友達が騒がしくしてすみません。でもこいつの化粧、ホントすごいですよ。一度やつてもらったら面白いかも」

「そうだよ、すごいよ。なにしろ俺、化粧の腕を買われて、昔女装モデルしてたんだから。今はしがないサラリーマンだけど」

チカがクスツと喉を鳴らす。『鉄ちゃん』が肩をすくめ、テーブルにカップをおいた。

「化粧の腕がいいことと女装モデルだったことは、つながんないだろ？ それに、チカは別にしがなくないじゃん。今は日本と海外往復してバリバリやってるんだろ？」

「はーいりつちゃん、とりあえずファンデ直して、アイライン入れてあげる」

『鉄ちゃん』の言葉を遮るように声を上げ、チカが利都の顔を覗き込んだ。

「チークの色は可愛いね。アイラインとこのチークとマスカラで仕上げてあげる。りつちゃん、目をつぶって」

利都は、チカに言われるがままに目を閉じた。

——わ、私……流されてる……！

「肌、綺麗だね」

「い、いえ、ぼろぼろです」

チカのお世辞に、利都は愛想笑いをした。

それにしてもチカの手つきは優しい。撫でるように丁寧な顔に触れられ、うっとりとした利都は、握り締めていた拳を緩める。

「……なんか、子猫みたいだ」

「え？」

チカの呟きに、利都は目をつぶったまま声を上げた。

「りつちゃんてさあ、警戒心ばりばりなのに、撫でるとほにゃーってしてるからさ……はい、メイクできたー、目を開けて」

利都は、差し出されたファンデーシヨンのコンパクトの鏡を覗き込む。いつもよりはつきりした目元の自分が、鏡の向こうにいた。

パンケーキが運ばれてきたことも気づかず鏡に見入る。傍らのチカが、嬉しそうに利都の顔を見つめた。

「その顔、気に入った？」

「はい！」

メイク一つでこんな顔になれるなんて嘘のようだ。厚塗りしたわけでもないのに、利都の顔は明るく輝いて見える。

「アイシャドウのハイライトは明るいピンクだったから、それをちよつとチークに混ぜた」

化粧品を混ぜるといふ発想がなかった利都は、チカの言葉に驚いて目を見張った。

「可愛くなったでしょう。気に入ったならアイラインの入れ方とか教えてあげる」

利都は嬉しくなり、素直に頷いた。こんなに明るい気分で見ただのは久しぶりだし、メイクでこんなに変わったのも初めてだ。

チカが音もなく立ち上がり、利都の向かいの席に戻った。

「ご飯食べようか。冷めちゃうしね……ねえ、りっちゃん、このあと暇？ もう少し今の教えてあげよっか」

「本当ですか？ 嬉しい！」

鏡から目を離せぬまま、利都は素直にそう返事をした。うきうきした気分になるのは久しぶりだ。

「じゃあさ、川沿いの公園に行つて、明るいところでメイクの練習しよ？ 途中の薬局でメイク落とし買うから」

「はい」

利都は再び、素直に頷いた。その様子を見て、チカが軽く笑い声を上げる。

「そんなに喜んでもらえると、俺も嬉しいよ」

そう言いながら優雅にミートローフにナイフを入れ、チカが肉片を口に運ぶ。

利都も慌ててファンデーシヨンのコンパクトを閉じ、ポーチにしまつて、パンケーキを頬張った。

——— 那样的えば今日は、チカさんの話を聞きにきたんだ。彼はどうして私のことを知ってるのだろう？

もつとも、大したことではないのだと思う。仕事先のどこかで見かけたとか、その程度のことだろう。チカは暇つぶしに、自分を呼び出したに違いない。

利都はその考えに納得し、残りのパンケーキを食べた。

ともかく今は、メイクの方法を教えてもらえるのが嬉しいし、こんなに綺麗な人と話ができるのも楽しい。

利都は、興奮でほんのり火照る頬をそつと指先で押さえた。

食事を終え、川沿いの公園に着くやいなや、チカはコートを脱いで袖まくりをした。

ただならぬやる気に利都は息を呑む。那样的えば道中のドラッグストアで、チカはあれこれと買

い込んでいた。

「やっぱりメイクの色って自然光の下で確かめたいよね」

チカが真剣な顔で言う。利都はチカから預かったコートとトートバッグを膝ひざに抱いたまま、ベンチに腰を下ろした。

「はい、目をつぶって。あ、りっちゃん、あのさ、メイクでかぶれたことある？」

「ないです。肌は丈夫なので」

「了解」

チカが真剣な顔で利都の前にかがみ込む。美しい顔が近づき、利都は恥はにかずかしくなって、固く目をつぶった。

「そんなにギュッとつぶらないで。今からメイク落とすね」

冷たいコットンが優しくまぶたの上を滑る。利都は身体を硬くして、されるがままに身を任せた。化粧を落としたあとになにかを塗られ、ファンデーションをそつと重ねられる。

「りっちゃん、右目だけ開けてくれる？」

「なんだろう、と思いつながら、利都は右目を開けた。

チカがニコッと笑い、利都が見たことのない新品のアイライナーを目の前にかざす。

「じゃーん、これもさつき買いました。パール入りのブラウン・グレー。りっちゃんには多分、派手な色よりこういう色が似合います！」

「えっ、買ったんですか？ あとでお金払えばいいですか？」

「いいよ、俺の趣味なんだから」

チカは、美しい顔を利都に近づけた。

思わず目を閉じようとした利都に、優しい声で言う。

「俺が今から左目にアイライナー引くから、そのコンパクトの鏡でやり方見ててね」

「わかりました」

チカが真剣な眼差しで利都の目元に筆先を走らせる。

鏡を見ていろ、と言われたのに、利都は手元の鏡ではなく、チカをじっと見ていた。

——チカさんの目、ちゃんと見えてるのかな、ガラス玉みたいで綺麗すぎる。髪も目も肌もすごくぴかぴかだし……女の私より綺麗。

「こういうふうに睫毛まつげの間を埋めてね」

「は、はい」

「じゃあ、自分でやってみよう」

チカにアイライナーを手渡され、利都はその筆先を思いきり目に突っ込んだ。

「痛っ！」

「またも大失敗してしまった。まともにアイライナーを引けた試しがない。目に物を近づけるのが怖くていつも手が震えてしまうのだ。」

「ちよっ……りっちゃん！ なにやってんの！」

「び、ごめんなさい！ ホントごめんなさい！」

大慌てで謝ると、チカが眉根を寄せて利都の顔を覗き込んだ。甘い香りが利都の鼻先をくすぐる。「目は大丈夫？」

どくどくと高鳴る心臓をごまかすように、利都は笑顔を作って、わざとらしくらい明るく答えた。

「大丈夫です！ 目の周り真っ黒になっちゃった」

「落とそうか」

情けない思いで、利都は頷いた。

女なのにこんなに化粧が下手だなんて、ありえないのではないだろうか。

「にしても、ぶっ……思いきりよすぎるね……」

利都の顔に指を添え、コットンで化粧を落としながらチカが肩を震わせる。笑われた。そう思っ
てそっと唇を囁む利都に、チカが言った。

「アイライナーは危ないからやめとこっか」

まだ、チカは笑っている。相当におかしかったらしい。利都はますます恥ずかしくなっ
てうつぶ
いた。

「アイシャドウでも目元はくつきりさせられるよ。りっちゃんはずピンでもほんわかしてて可愛
いけど」

「い、いや……そんなことはないですよ」

こんな美青年に『可愛い』などと言われても説得力がない。

利都は曖昧に笑ってごまかし、渡されたコットンで目元を押さえてアイライナーを拭いた。

こんな素敵な王子様の前で、アイライナーを目に突っ込む女なんて自分だけではないだろうか。

そう思ったら、だんだんおかしくなって自分も笑い出してしまった。

「あはは、ははっ……はあ、今日は晴れてよかったですね」

しみじみと空を見上げながら、利都は言った。

今日の自分は、嫌なことをすっかり忘れている。

「りっちゃんって、いい子だね」

ベンチの隣に腰を下ろし、チカは膝の上に肘をつく。

「えっ!? いいえ、そんなことはないです」

「あは、素直だなあ」

また『素直』だと言われた。

『素直』という言葉は、親や先生が利都を褒める時に使う言葉だ。

けれど、こんな素敵な人から聞きたい言葉かと言われれば、違うように思える。

利都は目を伏せ、チカの言葉に答えた。

「あの、素直って良いことなんですか？」

「うん、良いことだよ」

チカの答えに、利都は思わず傍らの彼を見上げた。

形の良い顎を反らせ、澄みきった早春の空を見上げながら、チカがやわらかな声で言う。

「素直な女の子ってすごく可愛く見える。俺に言わせれば、真面目で素直って最高の長所だよ」
褒められて、利都の顔がかっと熱を持つ。

焼けるように熱くなった耳を両手で隠し、利都は慌ててうつむいた。

チカに他意がないことはわかっているけれど、こんなに素敵な王子様に褒められるのはとても恥ずかしい。

「りっちゃん」

「はっ、はいっ」

「なんだか今日、楽しいね」

チカが、満面の笑みで言った。

利都は火照った顔を両手で覆いながら、チカの光のような笑顔を見上げる。

「そう、ですね、楽しい……です」

利都はチカの言葉に頷き、もう一度答えた。

「すごく楽しいです。ありがとうございます」

その答えに、チカが形の良い目を見開く。彼の透き通った目に、笑う利都の顔が映っている。

「……そっか、楽しいなら良かった」

チカも笑った。まるで太陽に向かって咲く花のような、曇りのない笑顔だ。その鮮やかさに、利都は強く惹き込まれた。

王子様の存在が、利都の胸一杯に広がる。

——ああ、なんてきらきらした人なんだろう。

「りっちゃん、化粧の仕方、もうちょっと教えてあげる。そのあと、コーヒー飲みに行こうよ」
笑いながらそう言ってくれたチカに、利都も笑顔で答えた。

「はっ」

利都の心は、弾んでいた。

——私、まだ会って二回目の、ほとんどなにも知らない人と一緒なのに、どうしてこんなに楽しいのだろう。

そう思いながら、利都はチカと一緒に街を歩く。

ナンパしてきた人と一緒に過ごすなんて、自分らしくもない大胆な行動だった。

でも今日、周りの風景が輝いて見えるのは、この王子様のおかげだ。

「ここ！俺ここに来たかったの。久しぶりだな」

チカが笑いながら、古びたベルのぶら下がった、木造のドアを押す。

「素敵なお店ですね」

利都の言葉に、チカが嬉しそうに頷いた。

「コーヒーがすごく美味しいよ。今日は寒いけど、オススメは水出しアイスコーヒー」

利都は、クラシカルな内装の店内を見回した。旧式のコーヒーサイフォンが飾られた、落ち着いた佇まいの店だ。昔の漫画が本棚に並べてある。

狭いカウンターにチカと寄り添って座りながら、利都は話を切り出してみた。

「チカさん、あの、チカさんが前から私を知ってたって話なんですけど、そのお話、伺^{うかが}ってもいいですか？」

チカは一瞬真顔になる。

利都から目をそらし、しばらく無表情でなにかを考えていた。

「あの……俺、りっちゃん^{りっちゃん}が俺の知り合いと一緒にいるところを見たんだよね……」

「どなたですか？」

チカが、さらさらの髪をぐしゃりとかき回す。悩んでいるような仕草に、利都は内心、首をかしながら。

——どうしたんだろう？ 言にくい話なのかな？

「ごめん、やっぱり、話すのはもう少し考えてからにしている？」

「えっ!？」

肩すかしな答えに、利都は思わず声を上げた。

「ごめん！ 俺めちゃくちゃ怪しいヤツだよね!？」

「え、えっと、少し……?」

利都が正直に答えると、チカががくりとうなだれる。

「だよね……あ、これ俺の名刺。あげるよ。明らかに怪しいと思うけど、俺は一応普通のサラリーマンだからね!」

しよげた顔のまま、チカが黒い名刺入れから名刺を取り出す。利都は、両手でそれを受け取った。

「ありがとうございます」

公益財団法人、澤菱財団の総務部秘書課付けの名刺だ。名前には、澤菱寛親、と書かれている。

その苗字に、利都はぎょっとした。

澤菱家は、日本でも指折りの名家だ。利都の勤め先の澤菱商事は、澤菱グループという巨大企業に属している。そのグループのオーナー一族が、澤菱家なのである。

利都の会社にも、縁故採用された澤菱家の遠縁の人間がいるが、彼らはおしなべて『セレブ』だ。外車に乗り、頻繁に海外旅行へ行き、庶民とは別格の暮らしをしていると社内で噂されている。遠縁の人間ですらそうなのだから、澤菱の姓を名乗る人ともなれば、雲の上の存在であることは間違いない。

「あ、澤菱って苗字に引いちゃった？ でも俺は、庶民だよ」

チカの明るい声に、利都は思わずホッとした。

事情はよくわからないが、気さくで優しいチカの言うことに嘘はないように思える。

苗字は同じでも、庶民の『澤菱さん』もいるのかもしれない。

「チカさんも澤菱グループなんですね、私と一緒にです。澤菱財団って、なにをなさっている団体なんですか？」

「美術館とかの経営。あと学者さんにお金を支援したりする仕事かな。俺はそこで、外国の友達のおつてを使って、展示会用の美術品を貸してもらえるように交渉したり、海外の研究者をお呼びした

レセプションを企画したり、そのゲストに誰を呼ぶか考えたりする仕事をしてるんだ。まあ、いわゆる事務職かな」

「事務職……？」

利都は首をひねった。事務員の仕事としてはあまり聞かない内容だ。

「うん、あれ？ 普通の事務職……だよな？」

逆にチカから問い返されてしまい、よくわからぬまま、曖昧に利都は頷いた。業務内容を詮索するような会話はやめたほうがいいかもしれない、と思う。澤菱という苗字ではあるけれど、庶民なんだと彼が言っているのだから、平凡な家の出身なのだろう。だいたい、雲の上の存在がその辺で女の子をナンパするわけがない。

「ところで水出しコーヒーって時間がかかるんでしょうか」

利都のひとりごと、マスターが笑顔で言った。

「もう抽出してあるものをお出ししますよ。毎日、八時間かけて抽出していますからね」

チカと利都の前にコースターと、大きな氷が一つ入ったアイスコーヒーのグラスがおかれた。

「美味しそう」

「そうだ、ケーキも頼む？ ブラウニーとかあるよ」

メニューを差し出され、利都は思わず胸の前で指を組み合わせた。

「食べたいです！」

「じゃあごちそうする。すみません、ブラウニー二つ！」

チカが明るいついでスイーツを注文し、笑顔で利都を振り返る。

「ごめんね、さっきはなんだか思わせぶりの話をしちゃって。でも、ちょっと俺が気になってることを確認したら、ちゃんと話すから」

「私は澤菱商事で働いてるんです。チカさんの勤め先と同じグループ企業ですよ？ だから、私とチカさんはどこかで会ったことがあるのかなって思ってたんですが、違うんですか？」

「違うよ。あ、りっちゃん、ブラウニー来たよ！ 食べよう」

チカはなにも話したくなさそう。利都は追及を諦め、目の前におかれたお菓みに集中することにした。

熱々のブラウニーは添えられた白いクリームが溶け始めていて、食欲をそそられる。

「美味しい！」

甘くほろ苦い味に、利都は歓声を上げた。

生クリームをからめたブラウニーは、水出しコーヒーのまろやかな香ばしさによく合う。

「でしょ、俺スイーツ大好き」

「チカさんって、すごく痩せてるのにお菓子好きなんですね」

王子様に軽口を叩く余裕が出てきた。

「あ、言ったな、これでも太ったんだよ」

「何キロですか？」

「十キロ」

その答えを聞いて、利都は小さな声で笑った。冗談だろう。チカが今より十キロも痩せていたら、骨と皮だけになってしまふ。

「チカさんには、私の余分なお肉あげますね」

「女の子って、皆そう言うけどさ、余分なお肉のない女の子なんてダメだよ」

「えー、嫌です、いらないます！」

「いやいや、俺はそんなの認めないね。肉つけようよ、女子は余分なお肉があつてこそでしょ」

チカと軽口を叩き合い、笑いながら、利都はブラウニーを頬張った。

この王子様には謎が多い。でもチカが親切で楽しい人だというのは間違いない。

「今日、本当に楽しいです。ありがとうございます。チカさん。こんなの一ヶ月ぶりくらい」

思わず漏らした本音に、チカが笑みを消し、驚いたように目を見張る。

「どうかしましたか？」

「あ、いや……」

チカが珍しく無表情になっている。

利都は不安になり、隣の彼を見上げた。

「そっか……一ヶ月前か……」

チカはそう呟いたあとで、カラカラとアイスコーヒーをストローでかき回した。

「ね、りっちゃん、この水出しコーヒー、本当に美味しいでしょう」

今の呟きはなんなのだろう。不思議に思いながらも頷いた利都の顔を、チカがじつと見つめた。

「なんか、今、そんなふうに笑顔でいてくれるとホッとする」

「えっ？」

「あ、いや、なんでもない。りっちゃんは笑顔が明るくていいなと思っただけ」

首をかしげる利都に微笑みかけ、チカが再びアイスコーヒーをかき回す。

「ねえ、りっちゃん、次どこに行く？ 梅の花でも見に行く？」

「梅の花ですか？ 見たいです」

次の予定を聞かれるということは、まだこの楽しい時間は終わらないのだ。そう思った瞬間、利都の心がばあっと華やいだ。

チカの態度に対する、小さな疑問も吹き飛ばす。

「じゃあさ。電車で二駅くらい先の公園に、すごく大きい梅の木があるんだ。それを見に行こう」

「はい」

利都は満面の笑みを浮かべて頷いた。チカは、口元をほころばせて利都を見つめている。

「りっちゃん、楽しい？」

「楽しいです……あの、最初はチカさんは何者なんだろうと怪しんでいたんですけど、今はそんなことないです」

「そっか、良かった！ 誘ったかいがあった」

チカがほんのりと耳を染めてしみじみと言う。

「……俺なんか、どうせ信用されないだろうなと思ってたから嬉しいよ。俺、昔から女の子に言わ

れるんだよね。派手に遊んでそうだって」

「派手に遊んでそうですよ？ イケメンすぎて彼女が五人くらいいいそう」

半分本気で、半分冗談めかしてそう言うと、チカがわざとらしく眉をひそめた。

「こら、待て。俺は真面目なお兄さんなんだけど」

「私なんか、なにも持っていない孤独なOLですよ」

『なにも持っていない孤独なOL』という自虐的な言葉が、利都の胸に突き刺さる。

冗談で口にしたはずのセリフなのに、その言葉は意外な強さで利都の心をえぐった。

そうだ、自分にはもう、親友も恋人もいないのだ。痛みをごまかしても、その事実は変わらない

し、あの二人に笑顔で会える未来は、永遠に来ない……

不意に表情を陰らせた利都に驚いたのか、チカが首をかしげて言った。

「どうしたの？」

「あ、いえ、なんでもありません」

慌てて首を振る利都の傍らで、チカが頬杖をついて呟いた。

「なんだか、ほっとけない顔するね」

「えっ……」

ほっとけない顔、とは、どういう意味だろう。

「俺もさ、自分が我慢すればいいや、つてすぐ溜め込んじゃうタイプなんだけど、そういうのダメ

だよ、辛いことは抱え込んじゃダメ」

利都の心臓が、どくん、と鳴った。

無意識に胸の上で拳を握り締めながら、利都はじっとチカを見つめた。

チカの美しい顔もまた、なにか痛みを抱えているように思えた。その痛みの正体はわからないけ

れど、間違いなく彼は心に傷を持っている。

「は、い」

少しかすれた声で利都は返事をした。チカはなにを考えているのか。どうして自分に優しくしてくれるのだろうか。

「どうしたの、そんなきよとした顔して。俺マジで言ってるんだから信用してよ」

「い、いえ、あの、チカさんもなにか、辛いことがあったのかなって」

そこまで言いかけて、利都は慌てて指先で口を覆った。出会ったばかりの人に対して踏み込みすぎだ。

「な、なんでもありません、余計なこと言ってます」

チカが目を見開いて、じっと自分を見ている。気を悪くさせたかな、と首をすくめた利都からゆっくり目をそらし、チカが小さな声で呟いた。

「えっと、なんて言うか、俺はいい年して、自分の実家が嫌いなんだよね。ちょっと問題の多い家でき。そのせいでかなり悩んで、それを誰にも言えずに溜め込んで、一度身体を壊しちゃったんだ」

瞬きもせずコーヒーのグラスを見つめていたチカが、弾かれたように顔を上げ、取りつくろっ

ているみたいな明るい声で言った。

「でも、りつちゃんはせっかく美人なんだから、可愛くして笑ってなって。悩みを溜め込んじゃダメだよ」

チカの優しさは伝わってくるが、すぐには納得できない言葉だった。

笑っても、明るく振る舞っていても、心に突き刺さったまま消えないものはある。

弘樹と舞子にされたことのように、なにをしても抜けない棘はあるのだ。

そういう棘はどう扱えばいいのだろう。どうすれば自分の痛みは消えるのか。

今だって、触れようとするだけで心が痛い。気づいたら、利都はかすかに目に涙を溜めて、チカに尋ねていた。

「……どうしても心から消せない傷は、どうしたらいいんですか？　どんなに悩んでも、私にはまだわからないです」

唇を噛んで、利都はチカの答えを待つ。中途半端に優しいことを言うなら、その先も教えてほしい。

——私は親友も恋人も一度に失ったのに。今の私にはなにもない。もう、どうしたらいいのかわからない……！

利都は、睨みつけているみたいな強い視線で、チカをじっと見つめた。

「それは」

利都の眼差しの強さに押されたのか、チカが虚を衝かれたように、言葉を失った。

からからと換気扇の回る音が聞こえる。マスターは、カウンターの隅で雑誌を手に座り込んでいた。ほんのりと暗い喫茶店のなかに、不思議な沈黙が落ちる。

「あ、あんまり、男に弱みを見せないほうがいいと思うよ。なんて言うか、あの、勘違いする奴らって、絶対……」

チカが少し動揺した様子でそう言い、慌てたように残りのアイスコーヒーを喉に流し込んだ。

利都は顔をしかめたまま、チカの端整な横顔を見つめた。

今のはどういう意味だろう。なんだか、話が繋がっていないような気がする。

「とにかく、辛いことがあるなら俺にぶちまけていいって。聞くしかできないけど、聞いてあげるよ。りつちゃんが辛くなるまで話を聞いてあげる」

チカが気を取り直したように微笑む。

利都は申し訳なくなり、うつむいた。

——ああ、今のは、私の八つ当たりだ……

謝ろう、と思つて顔を上げた利都の前で、チカが唐突に立ち上がった。

「そ、そうだ、梅の花、見に行こうか。マスター、お会計お願いします」

利都は謝罪しそこねたまま、チカにつられて立ち上がった。チカが利都と二人分の会計をしてくれる。

「チカさん、自分の分はお金払います」

「えっ?」

ぼんやりしていたチカが、なぜか赤い耳をして振り返った。

「あ、会計？ いいよ、奢るよ」

チカがドアを引いた瞬間、明るい光が差し込んできた。チカの淡い色の髪がきらきらと輝き、繊細な色合いの瞳に淡い影を落とす。

「りっちゃん、あの、さっきの話だけ……」

チカがわずかに赤く染まった顔で、利都から視線をそらしながら言った。

「ほんとにさ、なにか嫌なことがあるなら、楽になるまでいくらでも俺に愚痴^{ぐち}ついていいからね」
楽になるまでいくらでも、という言葉が、意外なほどの強さで利都の心をすくい上げる。

たとえ表面だけであっても、利都の悲しみに寄り添おうとしてくれる人がいる……その事実が、利都の心を明るく照らした。

「え、あ、ありがとうございます……大丈夫、です」

ぎこちない口調で利都は言った。頑^{かたく}なに目をそらしていたチカが、意を決したように手を伸ばし、利都の手を取った。

——手、握られた！

再び利都の心臓が跳ね上がる。チカは利都の手を引き、早足で歩き出した。

「これから一緒に梅の花見よう。綺麗だよ。気分転換になるから」

チカの言葉に、利都はこくりと頷^{うなづ}いた。顔が熱く、真っ赤になっていることが自分でもわかる。けれど利都の手を引いて先を歩くチカの耳も、同じように真っ赤に染まっていた。

チカに化粧の仕方を教わった日から、利都は自分に似合うメイクに挑戦し始めていた。

シックなブラウンで目の周りを淡く彩^{いろど}ると、なんだか『できる女』になったようで、仕事も捗^{はかど}る気がする。

「よし」

一日の仕事を終え、利都は帰宅前に会社の化粧室の鏡で朝塗ったアイシャドウを確認し、ブラウスの襟^{えり}を直す。

チカからプレゼントされたアイシャドウに励まされているような気がして、なんだか一日頼もしかった。

幸せな気分で、利都は鞆^{かばん}からスマートフォンを取り出した。

チカからまたメールが来ている。梅の花を見に行ったあと、利都はフリーメールからではなく、携帯のキャリアメールからチカにメールを送った。

彼は忙しいようなのに、こまめにメールをくれる。

チカは利都のことを友達だと思ってくれているのかもしれない。日曜日、ほんのわずかな間、手を繋いで歩いたことを思い出して、利都の表情は緩^{ゆる}んだ。

『今日も一日お疲れ様です。知り合いと話がいたので、りっちゃんをどこで見かけたのか話せそうです。今日、電話しても大丈夫？』

メールには、そう書かれていた。チカが電話をかけてくる。あの甘い優しい声を耳元で聞ける瞬

間を想像しつつ、利都はスマートフォンを鞆かばんにしまった。胸が、どくどくと高鳴っている。

——浮かれて変なこと書いちゃいそうだから、返事はあとにしよう……

深呼吸をし、利都は化粧室を出た。

今日の晩ご飯はどうしようかな、冷凍のパスタでいいかな、そう思いながら、利都は弾む足取りで会社をあとにする。

いつもの電車に揺られていたら、ようやく落ち着いてきた。利都はそっとスマートフォンを取り出す。

『ありがとうございます。今日の仕事は無事に終わりました！ 八時過ぎに家に着くので、それ以降であればいつでも大丈夫です』

深呼吸をして、メールを送信した。

——電話、本当に来るかな？

利都は自然と浮かぶ笑みを押し殺し、吊革につかまった。

家の最寄り駅で電車を降り、電話に備えて早く帰ろうと、少し暗いけれど近道になる裏道に足を踏み入れる。

普段は人通りの多い道を帰るのだが、今日は早く帰宅したい。

うきうきした気分で人気のない公園を横切った、その時だった。

突然、太い腕に喉のどを捕まえられる。

え、と思った瞬間、利都の身体は軽々と引きずられた。

汗臭い異臭が鼻につく。真っ白になった頭で、腕を振り解こうと利都は必死にもがいた。引きずられた身体がよるめき、足からパンプスが転げ落ちる。

変質者だ、と利都はようやく気づいた。全身に震えが走る。

大声で助けを呼ぼうとしたが、首を絞められていて、声がまともに出なかった。

抵抗しても男の力は強く、腕は外れない。

助けて、と祈った瞬間、自転車のブレーキ音が響き、男性の怒鳴り声が聞こえた。

「おいそこ！ なにしてる！」

どん、と利都の身体に衝撃が走る。

地面に突き飛ばされた利都の目を懐中電灯の眩まぶしい光が、焼いた。

「待て！」

地面に転がされたまま、利都は呆然と辺りを見回す。

「大丈夫ですか？」

ぼさぼさになった頭を直しもせず、利都は目の前にかがみ込む警官に頷うなづいた。

間一髪、パトロール中の警察官に助けてもらえたんだ、と気づいたのは一瞬あどだった。

ぐちゃぐちゃになって脱げかけたコート、ボタンの飛んだブラウス、破れたタイツというところ

もない姿のまま、利都は派出所で頭を下げた。

「すみませんでした。もうあの道は使わないようにします……」

思いきり首を絞められたせいか、ひどく喉が痛い。「変質者が頻繁に出てましてね、最近パトロール強化中だったんです。夜道では絶対に油断しないでください」

携帯を見ながら歩くな、音楽を聴きながら歩くな、マンションに入るなら辺りを見回してからにしない。警官の注意にぼんやりする頭で頷きながら、利都は涙をこらえた。

「大丈夫？ 親御さんに迎えに来てもらう？」

「いえ、私は一人暮らしなので……ご迷惑をおかけしました」
そう言って利都は立ち上がった。

家の近くにまだアイツがいるかも、と思うと不安でたまらない。駅前を夜中まで開いているファミリーストランがある。そこでちょっと休んで、タクシーで帰ろう。そう思い、利都は足を引きずるようにして歩き出した。

レストランのボックス席に腰を下ろす。ぐちゃぐちゃになったブラウスを隠すためにコートを羽織ったまま、利都は飲みものだけ注文して、大きく溜息をついた。

その時、靴のなかでスマートフォンが鳴っていることに気づいた。
慌てて壁の時計を見る。

もう九時だ。

あんなことに巻き込まれて、チカからの電話を気にかける余裕はなかった。

利都は靴から財布だけを抜いて立ち上がり、電話を片手に店の出入口付近まで移動した。足は痛

んだが、なんとか歩ける。画面を見ると、やはりチカからの電話だった。

「……はい」

喉が痛い、利都はあえて明るい声で返事をした。

『こんにちは……あれ、りっちゃん？ 声変じゃない？ どうしたの？』

チカの優しい声が、耳をくすぐった。たった二度一緒に過ごしただけの、王子様の言葉が利都のなかに蘇る。

なにか嫌なことがあるなら、俺に愚痴っていいからね、という言葉だ。

気づけば、利都の目からポロポロ涙が零れていた。

社交辞令だとわかっているのに、その言葉に縫りたい自分が情けない。出会って日の浅いチカを頼るなんて図々しいと思うけれど、怖い目にあつて、不安でどうしようもない利都は余裕を失っていた。

「え、つと、あの、さっき変質者に首絞められちゃって……」

電話の向こうで、チカが黙り込む気配がした。

しまった、と思い、利都は慌てて口をつぐむ。重い話をして嫌がられたのだ、と思い、利都は震える声で、話を終わらせようとした。

「そんなわけで、取り込み中なので、あとで改めて電話します」

小さく唇を噛み、咳き込みながらそう言って、スマートフォンの通話ボタンをオフにしようとした瞬間、チカの慌てたような声が聞こえた。